

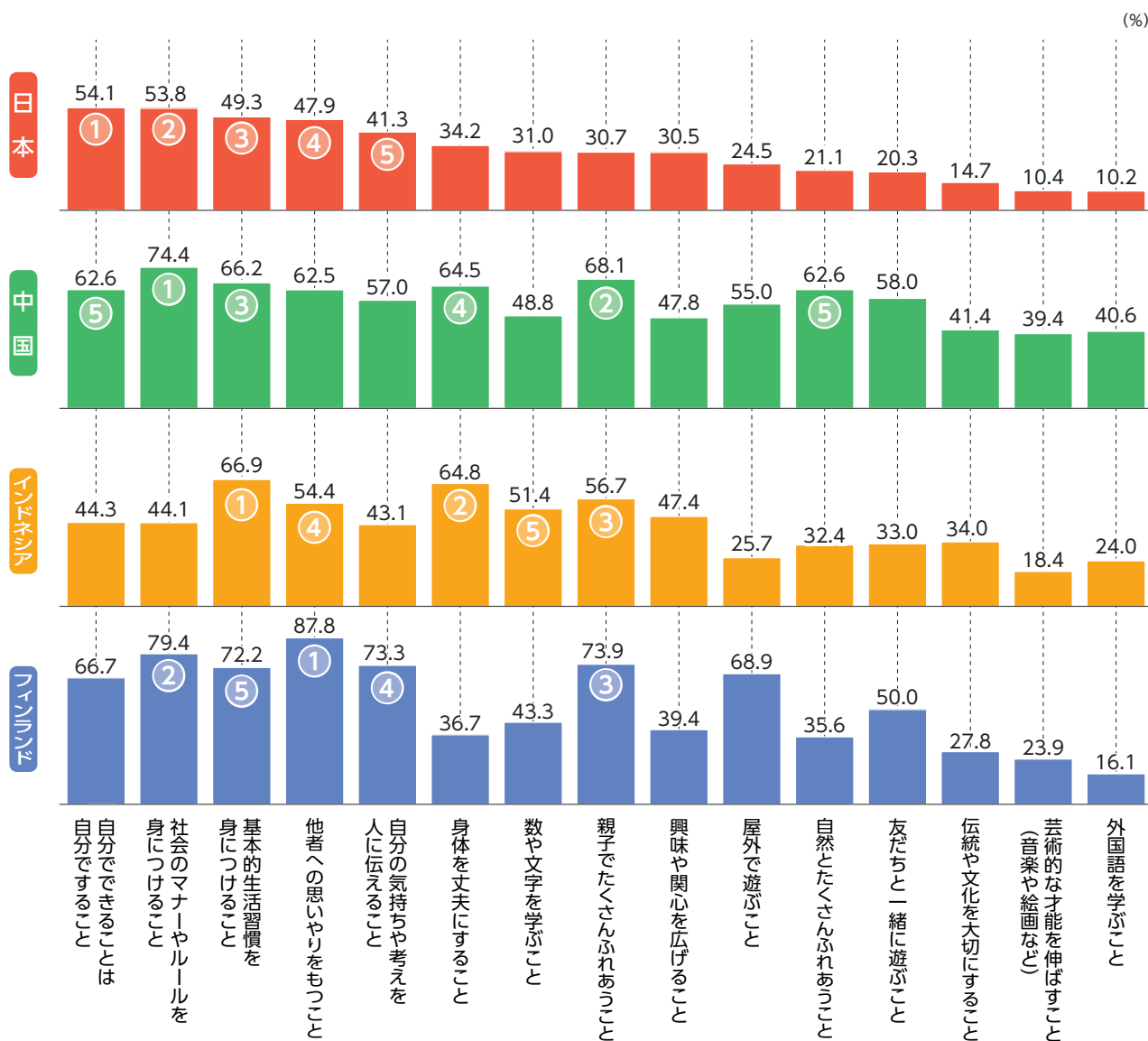
2 母親の教育・子育てについての意識

2-1 子育て方針

4か国ともに比率が高いのは「基本的な生活習慣を身につけること」。日本は「自分でできることは自分ですること」「社会のマナーやルールを身につけること」の順に比率が高く、5割を超える。

Q あなたは、どのようなことに力を入れてお子さまを育てていますか。

図2-1-1 子育て方針



※ 「とても力を入れている」の％
 ※ 日本の降順に表示
 ※ 各国の上位5位までの項目に①～⑤と表示

母親がどのようなことに力を入れて子どもを育てているかをきいたところ、4か国すべてで上位5項目以内に入ったのが「基本的な生活習慣を身につけること」だった。日本では「自分でできることは自分ですること」「社会のマナーやルールを身につけること」「基本的な生活習慣を身につけること」の順であった。日本以外の3か国では、2位、3位に「親子でたくさんふれあうこと」が入っている。

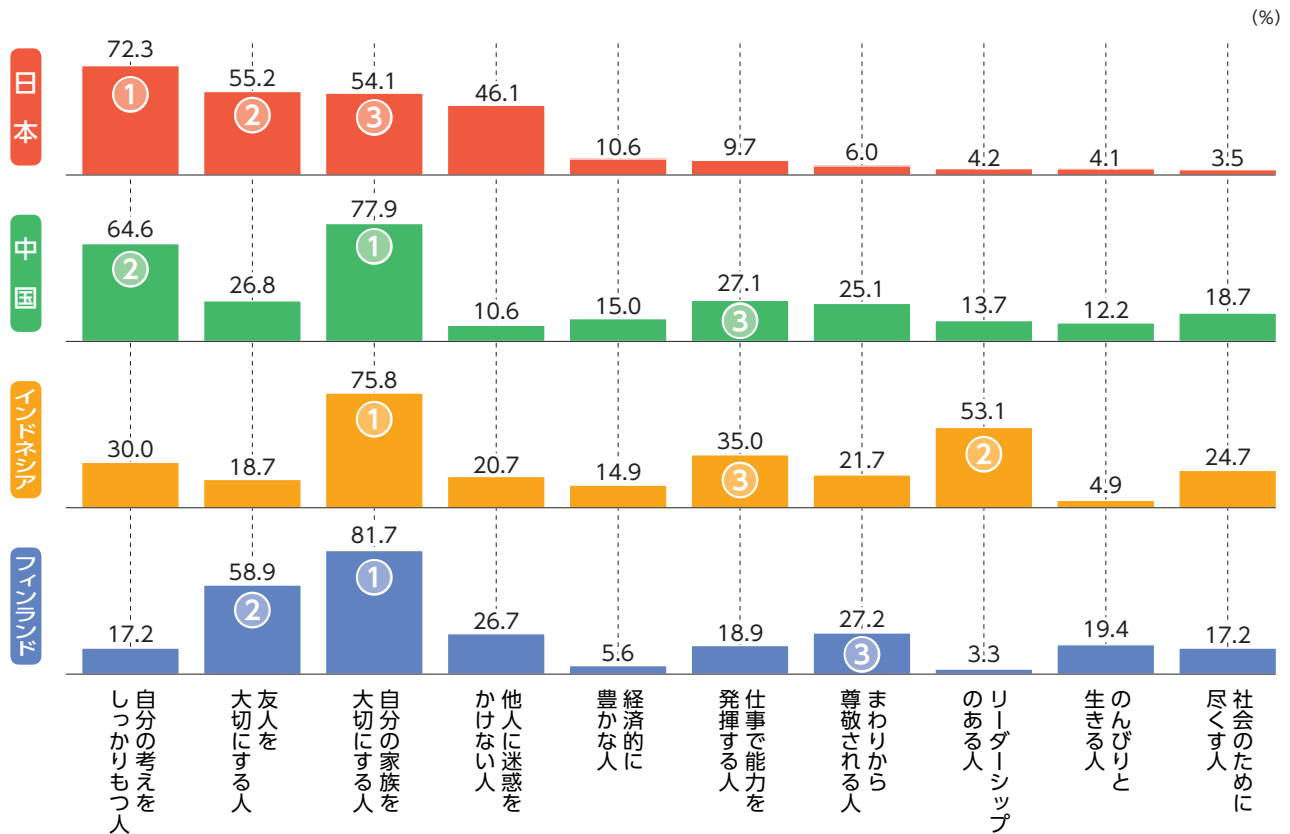
中国では「社会のマナーやルールを身につけること」がもっとも重視されている。インドネシアの1位は「基本的な生活習慣を身につけること」で、2位に「身体を丈夫にすること」が入っている。フィンランドでは「他者への思いやりをもつこと」が1位である。「芸術的な才能を伸ばすこと」「外国語を学ぶこと」は中国で約4割だが、その他の国では1～2割であった。

2-2 子どもの将来に対する期待

子どもの将来に対する期待について、日本では「自分の考えをしっかりとつ人」が72.3%ともっとも高い。進学期待では、日本は「四年制大学卒業まで」を選択する比率は高く、中国やインドネシアは大学院までの進学を望む比率が日本よりも高い。

Q 対象のお子様に、将来どのような人になってほしいと思いますか。3つまで選択してください。

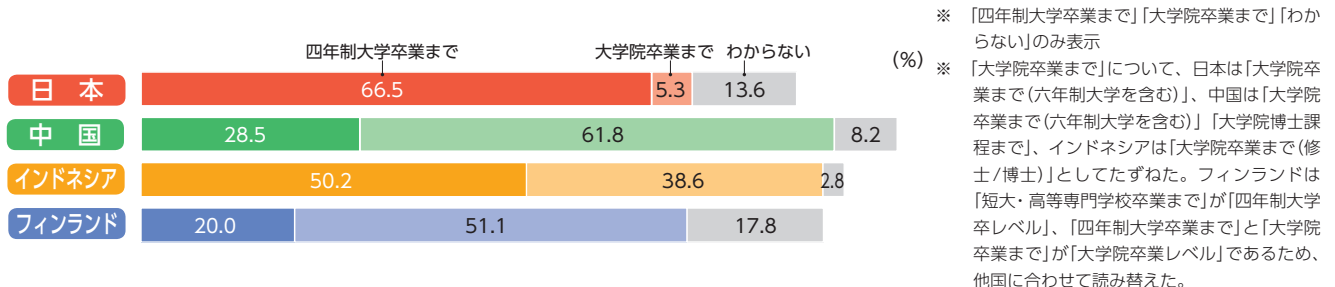
図2-2-1 子どもの将来に対する期待



※ 「あてはまるものはない」を含む11項目中3つまで選択 ※ 日本の降順に表示 ※ 各国の上位3つまでの項目に①②③と表示

Q 現在、対象のお子様を、どの程度まで進学させたいとお考えですか。

図2-2-2 子どもの進学に対する期待



※ 「四年制大学卒業まで」「大学院卒業まで」「わからない」のみ表示
 ※ 「大学院卒業まで」について、日本は「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」、中国は「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」「大学院博士課程まで」、インドネシアは「大学院卒業まで(修士/博士)」としてたずねた。フィンランドは「短大・高等専門学校卒業まで」が「四年制大学卒業レベル」、「四年制大学卒業まで」と「大学院卒業まで」が「大学院卒業レベル」であるため、他国に合わせて読み替えた。

子どもにどのような人になってほしいかについて、「あてはまるものはない」を含む11項目中3つまで選んでもらった。「自分の家族を大切にできる人」は、どの国でも選ばれる比率が高く、日本以外では1位となっている(図2-2-1)。日本は「自分の考えをしっかりとつ人」が72.3%で1位であり、他の国と比べても高い。また「他人に迷惑をかける人」はフィンランド26.7%、インドネシア20.7%、

中国10.6%であるのに比べると、日本は46.1%と他の国より高い。

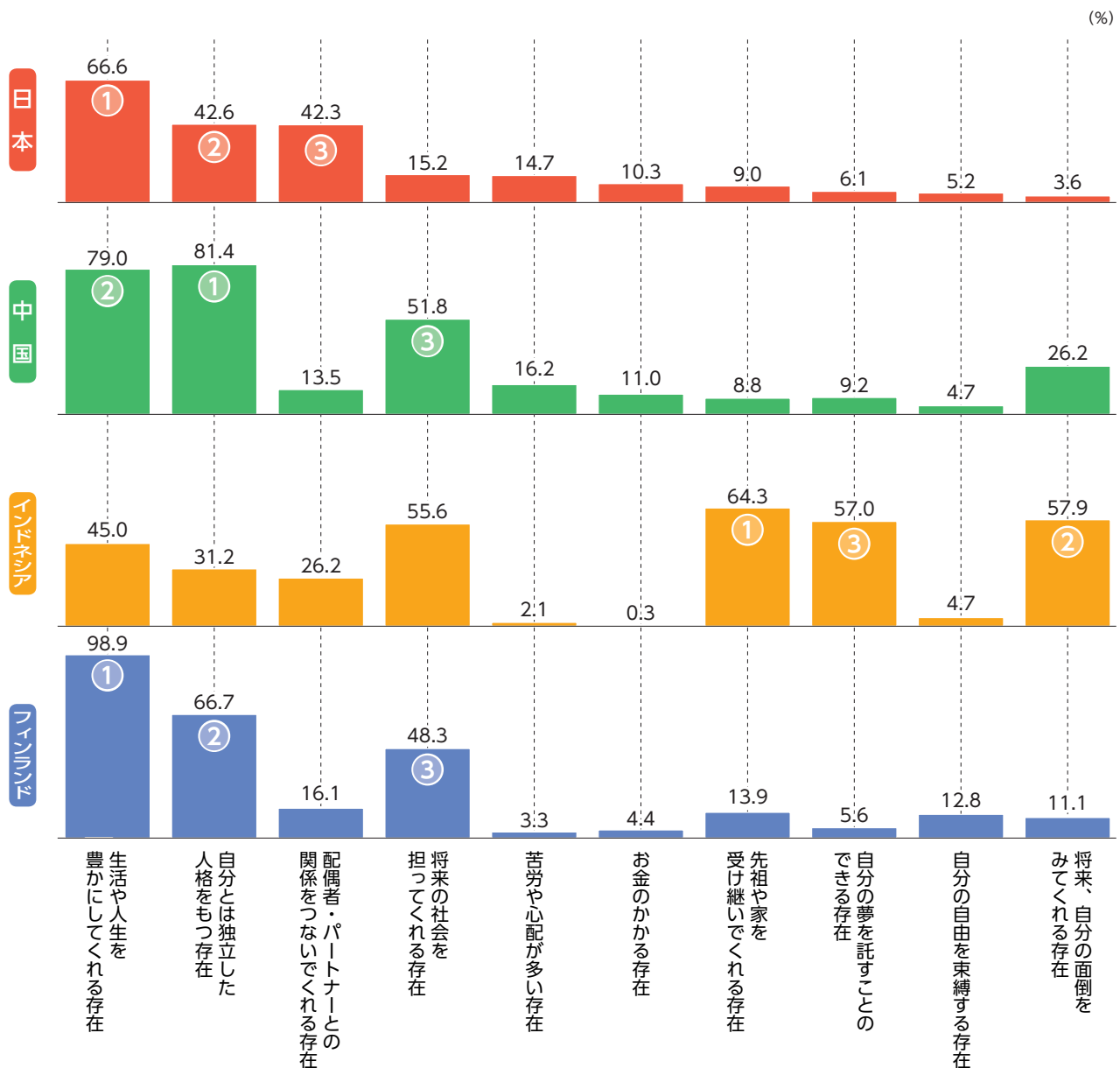
子どもの進学に対する期待は、日本は66.5%が「四年制大学卒業まで」であり、「大学院卒業まで」は5.3%と少数である(図2-2-2)。一方、中国では61.8%、インドネシアでは38.6%の母親が「大学院卒業まで」を選択している。学歴を重視する社会であることが影響していると考えられる。

2-3 子どもという存在

どの国の母親も、子どもをポジティブな存在としてとらえている。4か国中3か国で「生活や人生を豊かにしてくれる存在」「自分とは独立した人格をもつ存在」が上位1、2位を占めている。

Q あなたにとってお子様はどのような存在ですか。

図2-3-1 子どもという存在



※ 複数回答 ※ 日本の降順に表示
 ※ 各国の上位3位までの項目に①②③と表示

母親にとって子どもはどのような存在なのだろうか。複数回答形式で、4か国すべてで上位5項目以内に入ったのが「生活や人生を豊かにしてくれる存在」「将来の社会を担ってくれる存在」だった。「苦労や心配が多い存在」「自分の自由を束縛する存在」といった否定的な回答は、いずれの国も2割を下回っていた。4か国の母親とも、子どもをポジティブな存在としてとらえている様子がうかがえる。日本、中国、フィンランドは上位の項目が似ているが、

インドネシアは少し異なっている。「先祖や家を受け継いでくれる存在」(64.3%)、「将来、自分の面倒をみってくれる存在」(57.9%)、「自分の夢を託すことのできる存在」(57.0%)、が上位に来ており、他の3か国の値よりも30ポイント以上高い。

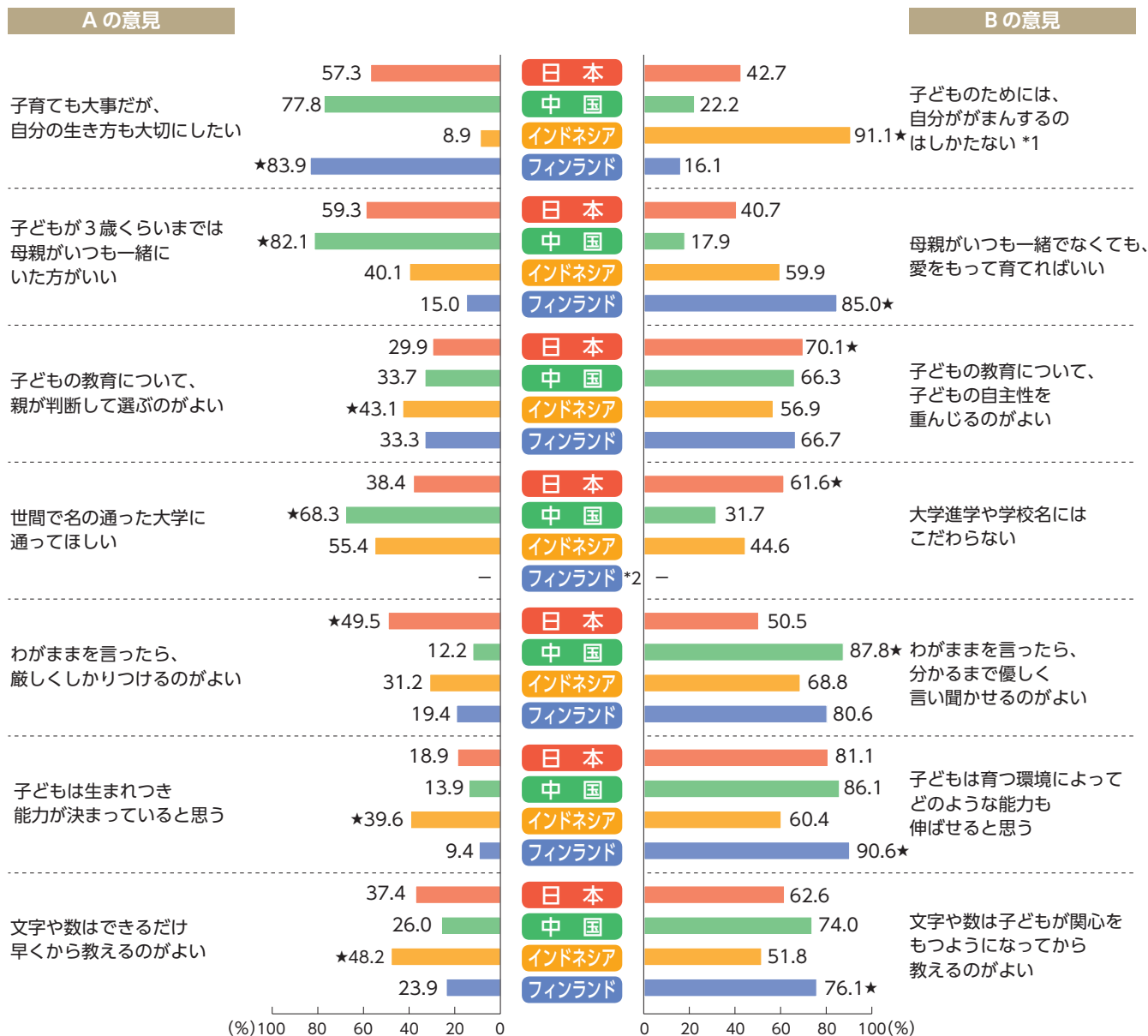
また、日本については「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」の比率が他国よりも高く(42.3%)、「将来の社会を担ってくれる存在」の比率が他国より低い(15.2%)。

2-4 母親の子育て観

子育てと自分の生き方のバランスや子どもの教育に対する考えなどは、国によって大きく異なっている。日本は「子どもの自主性を重んじるのがよい」「大学進学や学校名にはこだわらない」などが他国よりも高い。

Q 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近い方はどちらですか。

図2-4-1 母親の子育て観



※ ★印は各項目で4か国中もっとも高い数値
 *1 インドネシアの事情に応じて異なる翻訳をしている
 *2 フィンランドは聞いていない

大学進学について、「A.世間で名の通った大学に通ってほしい」か「B.大学進学や学校名にはこだわらない」のいずれかを選んでもらったところ（フィンランド以外の3か国）、Aを選択した比率は中国が最も高く（68.3%）、日本が最も低かった（38.4%）。また、子どもがわがママを言ったときのかかわりについて、「A.厳しくしかりつけるのがよい」か「B.分かるまで優しく言い聞かせるのがよい」かを選んでもらったところ、Aの比率は日本がもっとも高く

（49.5%）、他の3か国はいずれも1～3割程度と低かった。このように、子育て観は国によって異なっている項目が多いものの、「B.子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」「B.わがママを言ったら、分かるまで優しく言い聞かせるのがよい」「B.子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」比率は4か国とも5割を超えている。

2-5 教育やしつけの情報源

4か国ともに高いのは、「配偶者・パートナー」と「園の先生」で、どの国も約4割以上の母親が選んでいる。日本だけが特に高い、または低い項目は見られなかった。

Q あなたは対象のお子様のしつけや教育についての情報をどこから（誰から）得ていますか。

表2-5-1 教育やしつけの情報源

		日本	中国	インドネシア	フィンランド
家族など	配偶者・パートナー	58.8	41.3	86.1	51.1
	あなたの親	46.0	23.1	54.4	41.7
	あなたのきょうだいや親戚	18.6	11.8	27.3	21.7
	配偶者・パートナーの親	16.6	9.6	27.6	11.1
	配偶者・パートナーのきょうだいや親戚	3.9	4.6	11.7	2.2
社会など	あなたの友人・知人	52.1	52.2	33.0	63.9
	園の先生	39.8	57.5	49.7	52.2
	子どもの習い事や教室の先生	17.7	30.7	9.1	1.7
	子育てサークルの仲間(日本) / 育児を通して知り合った仲間*1	7.7	57.2	4.1	8.9
	教育の専門家*2	—	20.2	—	—
	病院の医師や看護師	7.0	8.7	1.2	6.7
	保健師や栄養士	3.9	4.0	0.8	1.7
	市区町村の子育てサービス窓口の人	2.8	1.2	3.3	25.6
	配偶者・パートナーの友人・知人	1.8	8.4	6.0	1.7
	インターネットやブログ	32.3	25.9	16.4	48.9
メディア	テレビ・ラジオ	19.2	16.5	18.4	7.8
	育児・教育雑誌	15.1	23.9	3.2	13.3
	育児書や教育書などの書籍	10.9	43.3	3.0	15.6
	ソーシャルメディア(Facebookなど)	8.4	58.8	6.4	12.8
	新聞	6.0	6.4	0.2	11.1
	その他	1.3	0.8	0.1	4.4
特になし	8.5	0.9	0.2	8.3	

※ 複数回答

※ 濃い網掛けは50%以上の項目

*1 各国の事情に応じて翻訳している。「育児を通して知り合った仲間(中国)」「子どもの学校などで知り合った仲間(インドネシア)」「地域の父親・母親仲間(フィンランド)」

*2 中国のみの項目

しつけや教育の情報源として、4か国ともに高い項目は、「配偶者・パートナー」「あなたの友人・知人」「園の先生」である。これらを選択している比率が約4割以上か、各国の上位4項目以内に入っている。

ただしもっとも高い項目は各国で異なり、日本が「配偶者・パートナー」(58.8%)、中国が「ソーシャルメディア」(58.8%)、インドネシアが「配偶者・パートナー」(86.1%)、フィンランドが「あなたの友人・知人」(63.9%)となってい

る。各国別にみると、中国は多様な分野から情報を得ている。インドネシアは家族を頼る比率が高く、メディアから情報を得る比率が低い。フィンランドは「インターネットやブログ」に加え、「園の先生」や「市区町村の子育てサービス窓口の人」(フィンランドには「ネウボラ」という制度がある)といった公共の人的資源の活用率が他国よりも高い。日本は他の国よりも目立って高い、または低い項目はみられなかった。